

IIAS「ゲーテの会」ブックレット
(VOL. 01064)

未来に向かう人類の英知を探る
－時代の裂け目の中で、人々は何に希望を見出してきたか－

(政治・経済分野)

島崎藤村「夜明け前」から見た
明治維新

公益財団法人国際高等研究所
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2018年10月23日開催の第64回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲートの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・転写を禁じます。ただし、個人としての利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

未来に向かう人類の英知を探る

－ 時代の裂け目の中で、人々は何に希望を見出してきたか －

島崎藤村

「夜明け前」から見た明治維新

藤村の『夜明け前』は、幕末の黒船出現から明治中期までの日本を、木曾路・馬籠宿の本陣、問屋、庄屋を務めた青山半蔵（藤村の実父）と周辺人物たちの思想と行動を通して描いた大作である。特に第一部は、脇本陣、年寄役の「大黒屋」大脇兵右衛門信興が40年以上にわたって書き続けた日記を主に用いて、幕末期の日本の社会状況と人々の経済生活を具体的に書き留めた点を特徴としている。講演では、この大作の中から、主要人物を取り上げて、経済活動と宗教（国学と神道）の問題、過激派思想の動き、神仏同体説などに焦点を当てつつ、「御一新」と「明治維新」が近代日本社会に何をもたらしたのかを考える。

猪木 武徳 (Takenori INOKI)

1945 年生まれ。大阪大学名誉教授、国際日本文化研究センター名誉教授。専門は、近現代の経済思想・経済史。

著書に、『経済思想』（岩波書店）、『自由と秩序』（中央公論新社）、『大学の反省』（NTT 出版）、『戦後世界経済史—自由と平等の視点から』、『経済学に何ができるか』（中公新書）などがある。



目次

はじめに

- ① 『夜明け前』との出会い
- ② 経済史的な視点から『夜明け前』を読む

I 「御一新」から明治維新へ

- (1) 封建制と近代化 — 明治維新は「ブルジョワ革命」か否か、という論争
- (2) 経済から見た連続性

II 素材としての『夜明け前』

- (1) 主人公・青山半蔵の背景
- (2) 資料となった『大黒屋日記』の存在
- (3) 「街道」という視点

III 経済の描写の入念さと確かさ

- (1) 人口増加地域と平田国学
 - ① 130年間変わらない人口の裏側
 - ② 人口増加地域に浸透する平田国学
- (2) 衰弱する幕府権力と藩の経済
 - ① 財政難とインフレーション
 - ② 劣悪な銀貨の流入と金の流出
 - ③ 裏切られた「御一新」への思い

IV 「近代人」の自己撞着

- (1) 宮川寛斎 — ビジネスと宗教の間
- (2) 暮田正香 — 過激派の転身
- (3) 松雲和尚 — 近代の神仏団体説

V 「御一新」への失望

- (1) 山林問題
- (2) 福沢諭吉の描写

質疑応答

2018年10月23日開催

第64回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：島崎藤村「夜明け前」から見た明治維新

講演者：猪木 武徳（大阪大学名誉教授）

(文中敬称略)

はじめに

① 『夜明け前』との出会い

島崎藤村の『夜明け前』という小説は、新潮文庫4巻からなる歴史文学の大作である。私が初めてこの小説を読んだのは1980年、35歳のときで、昨年再び読み直す機会があったが、昔読んだときとはまったく違う感動を得て、本当に素晴らしい作品だと改めて実感した。



「夜明け前」島崎藤村/新潮文庫

じつは、それよりもかなり前、日本の一般家庭にテレビが入り始めた頃に、私は『夜明け前』をテレビで見ている。我が家にテレビが来たのは私が小学5～6年の頃だったが、当時は民放もNHKも時間をどう埋めればよいかということに苦労していたので、よく昔の映画を放送していた。それで、1956～57年頃にテレビで映画の『夜明け前』を見たわけだが、子どもながらに暗い映画だと感じた。後で調べたところ、主人公の青山半蔵（島崎藤村の実父）を演じたのが滝沢修で、その他「劇団民藝」の俳優たちがたくさん出演しており、半蔵の娘で自殺未遂をする糸を若い頃の乙羽信子が演じていた。

2時間少々長さでこの大作全部を脚本に写すことは無理なのだが、所々割愛されていたと思うが、最後に滝沢修演じる青山半蔵は、自分の信奉していた平田国学が文部省をはじめ政府の政策と一致しなくなり、政教分離による落胆と心の傷を抱えたまま、東京で事件を起こすことになる。憂国の和歌を書き込んだ扇子を天皇の通るところに投げつけて捕らえられるのだが、郷里の馬籠に送り返されて後、ますます言動がおかしくなって、島崎家の菩提寺である曹洞宗の寺に火を放ったことから、気がふれたとして座敷牢に幽閉され、そこで亡くなってしまう。私はまだ幼かったので、全体のストーリーや細かい部分は覚えていないが、最後に座敷牢で半蔵が呟く場面、叫ぶ場面は、滝沢修という俳優の異様な迫力、演技力によって非常に薄気味悪かったことを覚えている。

その後、1980年に明治前期の経済政策の研究会に参加していたときに、主査を務められ

ていた東大の中村隆英先生が「幕末維新期の日本の社会の雰囲気は、当時の物価や労働力人口の構成等、経済学的な数字を捉えても、あるいは文献を見ても分からない。むしろ、良い文学を読んだ方がその時代の雰囲気がよく分かる」と言われ、その一例として島崎藤村の『夜明け前』を推奨された。私はその言葉を受けて『夜明け前』を読んだのである。

『夜明け前』は長編だが、藤村は詩人なので日本語が綺麗で読みやすく、かつ論理的で、「これはどういう意味なのか」と無用に立ち止まることなく、あまり長さを感じずに最後まで読むことができた。このような長編を読むと、内容に関する感激と、長い物語を読み終えたという達成感が混じり合って、非常に嬉しかったことを覚えている。

② 経済史的な視点から『夜明け前』を読む



島崎藤村(1872-1943)
Public domain,
via Wikimedia Commons

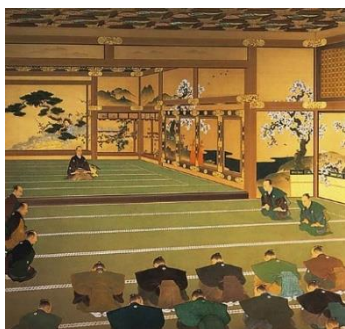
それから時を経て、昨年、今度は原稿を執筆するために、もう一度読む機会を得た。

私は近現代の経済史、特に労働の歴史を長く勉強し、いろいろなものを見てきたが、様々な変数を用いて、その時代の実際の社会の経済的構造を描くのに一番優れたモデルを組んで規定しても、そこにある種の物語性がなければ「本当に理解した」とは感じられない。つまり、我々は合理的に物事を説明するだけでは満足しないし、「こういう社会的な雰囲気があり、こういう偶然性が重なって、誰が意図したわけでもないのに社会がこう動いた」ということを記述できる手段は、経済学の理論では無理だろうと常々感じていた。

そこで、私は14年ほど前に、ストーリーを読みながら時代の雰囲気を知るという意味で『文芸にあらわれた日本の近代』という本を書いた。これは明治以降の日本の作家の作品から、代表作ではなく、例えば、三島由紀夫の『絹と明察』や谷崎潤一郎の『痴人の愛』、小林多喜二の『蟹工船』、大岡昇平の『野火』等、社会科学的な考察が可能なテーマを取り上げたものである。ところが、その後書きに「中村隆英先生たちの研究会で『夜明け前』を読んだが、それに関して一章書くことができなかったので、次の機会を待ちたい」と書いていたために、今になってある雑誌社から「明治維新 150 年なので『夜明け前』についてもう一度経済史的な視点から長いものを書いてほしい」と依頼があった。そこで私もうエネルギーがあまりないけれども、良い機会だと思って書くことにしたわけである。

Ⅰ 「御一新」から明治維新へ

(1) 封建制と近代化 — 明治維新は「ブルジョワ革命」か否か、という論争



壁画「大政奉還」

Public domain, via Wikimedia Commons

「明治維新」という言葉が使われるのは明治の中期以降で、それまでは「御一新」という言葉が使われていた。1867年に徳川慶喜による大政奉還が行われ、同年12月に維新の大令が出され、その1ヶ月後の1868年1月に、海外に対し、大使館、領事館等を通じて日本の政治的体制の変更が公表された。したがって、今年(2018年)の1月で明治維新から150年になる。

じつは経済史では「明治維新はどういう出来事だったのか」ということに関して、長らく論争があった。「革命」と呼ぶのか「復古」と呼ぶのか「改革」と呼ぶのかを巡って、学者たちが論争したわけである。その背景には、明治維新の政治的な体制の変換があまりにも強調されたために、そこに大きな断絶、非連続性が生じ、1968年以降は政治体制や日本経済の構造が変わったと考えられがちだったなかで、特に経済史の研究から「必ずしもそれほど断絶があったわけではない」という見方が出てきたという状況があった。

確かに、政治的には明治維新で士農工商の身分制度がなくなって華族・士族・平民という族籍に替わり、関所がなくなって国内の移動が自由になり、職業選択の自由も得られて雇用関係が身分ではなく契約になり、人身売買も禁止される等々、市場経済的な経済活動における自由がかなり保障されたという大きな転換点であったことは否めない。ただし、それによって明治時代が直ちに経済的な発展を遂げたかということ、それは有り得ないことで、実際はインフレーションが進行していた。

そのなかで一つ注目すべき点は、人口が明治維新以降急激に増加したということである。吉宗の時代の1720年頃から1854年頃まで、各藩に命じて人口の^{しごかい}悉皆調査が行われているが、これは恐らく日本が世界で最初に行ったものと思われる。ヨーロッパ社会では、子どもが生まれるとキリスト教の地域であれば教会で幼児洗礼を受けるので出生が把握されるが、必ずしも教会に属さない人たちもいたので、日本のように吉宗の時代から6年ごとに行われた人口調査に比べれば内容的には非常に粗い。

ただ、吉宗の時代から始まった日本の人口調査にも欠点があって、ほとんどの藩の統計において軍事用の理由から武士を数えていない。それでも、農民が9割以上を占めており、それに商工業者を加えると、武士の割合は全体の1割に満たないので、誤差は推測できる。

そのような人口調査を見ると、江戸中期の吉宗の時代(1720年頃)から黒船来航までの130年間、日本の人口はほとんど変わらず3,100万人前後で推移している。それ以前、江戸時代の初期の頃は人口増を経験しているが、1720年頃からの130年間は人口が変わって

いないのである。それがどういう意味を持つのかについては、後ほど触れたい。

(2) 経済から見た連続性

これを経済から見ると、19 世紀に入って間もない 1820 年頃、元号で言うと文化文政の頃の日本経済はある種の離陸を起こしている。新田開発は昔から行われていたが、いろいろな技術革新や藩ごとの物産の振興政策が行き渡って生産活動が盛んになり、工業も農村工業が盛んになって、19 世紀の初めから経済が成長の過程に入ったのである。明治維新はそれから 50 年ほど後に起こるが、それによって経済成長が途切れることはなく、むしろ維新後に加速したと考えてよいと思う。

つまり、明治維新は、経済面ではある種の連続性を持った成長軌道上で起こった一つの政治的大事件であり、それによって大きな体制の変換が起こり、封建的なくびきから放たれて自由を得たわけだが、政治的变化と経済的变化は区別して見るべきだと思っている。

II 素材としての『夜明け前』

(1) 主人公・青山半蔵の背景

藤村の『夜明け前』は、黒船来航から島崎藤村の実父をモデルとする主人公の青山半蔵が悲劇的な最期を遂げる明治 19 年頃までを描いた、大変に迫力のある小説である。そして、その迫力を生み出す源となったのが、じつに膨大な資料の存在だった。



中山道馬籠宿の藤村記念館（本陣）
Tawashi, CC BY-SA 3.0, via Wikimedia Commons

青山半蔵は身分的には農民だが、教養も高く、政治も行政もでき、馬籠宿の本陣、問屋、庄屋という三つの重要な仕事をしていた。本陣とは、大名や皇族関係者が宿泊したところで、一般の人は宿泊できない。したがって、大名や皇族関係者が中山道を通る際、馬籠宿で宿泊したのが半蔵の本陣だった。ところが、例えば、将軍の一行が宿泊するときなど、本陣だけでは足りないときがある。

14 代将軍の家茂は 3 回京都に行ったが、1 回目は 1863 年で、徳川家光が最後に訪れてから 230 年振りに京都に行って天皇に挨拶をしている。品のない言い方をすれば、政務を任されていることに対してお礼の仁義を切ったということである。その後 2 回、徳川家茂は長州征伐で江戸から京都に行っているが、家茂が京都に行く際は、付き人なども含めて 3,000 人とも言われる大変な数の行列だったようである。これは、多方面の機能を果たす将軍が動くとなると、その補佐役として千単位で人が動くことになるからである。

そうすると、宿場町はそれだけの大人数を泊めなければならないので、本陣だけでは足りなくなり、脇本陣というサブの位置に相当する、本陣の機能を補佐する家も宿として割り当てられる。脇本陣は酒造業を営むところが多かったが、昔の酒造元は金持ちが多くて金融も手掛けていた。そのような脇本陣に大脇兵右衛門信興という青山半蔵の親友がいたが、そこにも千単位の人たちを差配し、周りの農家等も含めて宿泊場所を確保した。そのような仕事の本陣、脇本陣の重要な役割だった。

それと同時に、青山半蔵は問屋や庄屋の役割も果たしていた。問屋は日本の郵便制度の前身とも言える一種の伝馬制で、宿場に届いた荷物を次の宿場に届ける仕事の手配をする。千を超える人たちの旅行の身の周り品や様々な献上品等をすべて宿から宿に移すわけだが、それには馬と人が要るので、馬は近隣の農村から調達し、労働力は助郷制度で農民を集めて仕事を割り当て、大名の通行がスムーズに行くようにした。一方、庄屋は一種の行政と政治を行うので、村方三役のうちでは町長のような重要なポストだった。

(2) 資料となった『大黒屋日記』の存在

青山半蔵はそうように本陣と問屋と庄屋の役を務めており、馬籠にあった20~30の村を統合する重要な仕事をしていたが、そのサブの位置に、前述の大脇兵右衛門信興がいた。そして、大脇はじつに40年間も詳細な日記をつけていた。脇本陣の酒屋の名が「大黒屋」だったので、この日記は通称『大黒屋日記』と呼ばれ、一部が活字になって『島崎藤村全集』の中に入っている。極めて綿密な日記で、私はそれを読んだことがないが、藤村の専門家も全部読んだ人はあまりいないのではないかとされるほどの凄い資料である。それを藤村は『夜明け前』の資料として用いている。

『夜明け前』は第1部・第2部で構成され、新潮文庫で4巻になるが、2巻半くらいは『大黒屋日記』を使って、当時の人々がどのような生活をしていたか、どのような地域のトラブルが発生していたかなどを書いている。

例えば、幕末の東海道は治安が悪く、追い剥ぎが出たので、身分の高い人たちは東海道を通らず、前述のように家茂が京都に行くときも、皇女和宮が江戸へ行くときも中山道を通っている。

そこで、そういう人たちが馬籠宿を訪れたときに何が起こり、宿泊の状態はどうだったか、食事は何を出して、何を食べたか等も『大黒屋日記』には記されている。

一方で、助郷制度に協力しない状態も起きている。農民も税金だけではなく労役まで求められると、量が多くて応じることができないこともあり、むしろもっと金になる別の仕事をした方がよいと考えて、助郷のために人を集める本陣、脇本陣の依頼を断るという状況が生まれるわけである。それも含めて、じつに綿密に記録されている。



馬籠宿の風景

663highland, CC BY-SA 4.0, via Wikimedia

つまり、『夜明け前』の最初から 6 割ほどの記述が綿密で細かく、具体的な名詞を使って当時の人々の日常生活が詳細に記述され、迫力を持ったおもしろいものとなっているのは、このように 40 年に渡って綴られた『大黒屋日記』を資料として使っていたからなのである。

(3) 「街道」という視点

理髪店でも公衆浴場でも人が集まるところは、いろいろな人が政治の話や今何が起きているかなどを話す情報交換の場となる。同様に、交通の要衝も人が集まる情報の結節点である。明治維新を語る場合、江戸で何が起こったか、京都や大阪はどうだったか、薩摩、周防・長門、土佐等、維新の志士が出た西南雄藩の状況はどうだったかということが一般の耳目を集め、関心の高いところだが、そのような情報は街道筋の大きな宿場に集まったので、藤村はそれを『大黒屋日記』を使って分析している。そこに『夜明け前』の面白さがある。

藤村の『夜明け前』を見ると、大都会から見た政治の変動ではなく、宿場という情報の結節点から見た明治維新の方が意外と情報が多いことが分かる。大都市はどうしても偏った情報が集まるので、むしろいろいろな人が通る街道には、多面的にいろいろな情報を裏書きしたり、ミックスしたりするような作用があったのではないかと思われる。それを藤村は「交通の持ち来たす変革は水のように、あらゆる変革のなかの最も弱く柔らかなもので、しかも最も根深く強いものと感ぜらるることだ。その力は貴賤貧富を貫く。人間社会の盛衰を左右する。歴史を織り、地図をも変える。そこには勢い一切のものの交換ということが起こる」と言っている。つまり、京都・大坂・江戸で何が起きているかという情報は、意外と距離を置いた、このような宿場で知ることができるということである。

このように、資料として綿密な日記があったことと、たまたま島崎藤村の郷里が本陣をしている島崎家で、馬籠という重要な宿であったこと、そこが妻籠も中津川も近く、伊那、飯田も近かったことは大きな意味があったと思う。飯田という地は、明治維新の国学において重要な役割を果たしたことが『夜明け前』の中に描かれている。私はそれを読んで飯田に行ったが、馬籠から南の方に出て飯田に向かう伊那谷の辺りは平田篤胤の『古史伝』を翻刻した国学者たちが集まっていたところのようである。

同時に、水戸藩で藤田東湖等の国学の影響を受けて過激な攘夷思想を持った天狗党が、筑波山から京都に向かう途中、飯田の辺りを通過している。それを示すものとして、飯田市の市役所近くの公園には天狗党が通過したことを記した碑がある。

天狗党については吉村昭が『天狗争乱』という素晴らしい本を書いている。私は『天狗争乱』を志士の歴史的な視点から調べたことはないが、吉村昭という小説家を尊敬して、彼の書いたものをたくさん読んできたので、それを基にすれば、天狗党は敦賀の方まで逃げ延びたが、最後は 500 名ほどの過激な攘夷思想の持主たちが首を刎ねられて死んでしまう。その天狗党が追われて逃げ惑う途中で伊那谷を通過していたのである。

そのような歴史を持つ飯田や伊那谷にも近く、妻籠、中津川等へも一日歩けば到着できる場所に郷里があったことは、藤村にとって幸運だったと言える。

III 経済の描写の入念さと確かさ

(1) 人口増加地域と平田国学

① 130年間変わらない人口の裏側

さらに、経済描写が非常に素晴らしいと思うところがいくつかある。1点目は人口の問題で、前述のように、1720年の吉宗の時代の人口調査から、幕府に統制力がなくなって人口調査ができなくなる以前の1854年頃まで、日本の人口は3,100万人を上下していた。これについて、私は面白いことを『夜明け前』の中で見つけた。130年間日本の人口はほとんど変わらなかったが、じつは、江戸も大坂も京都も大都市は人口減を経験している。和歌山大学におられた関山直太郎という歴史人口学の大家は、我々より前の世代の方ですでに亡くなられているが、その綿密な研究によって、江戸、大坂、京都は独身者が増えたことと晩婚で出生率が落ちたことを人口減少の要因とされている。これは現代に起こっていることと非常に似ている。

注目すべきは、全体は3,100万人で推移したけれども、藩別に人口の増減を調べてみると大変な差があったということである。主に北関東と東北は人口が減少しているが、それに対して、目立った人口増を記録している藩が薩摩、周防・長門、土佐、津和野等、明治維新前後の志士たちを輩出したところである。これを経済学的にどう解釈するかは、大問題ではないとしても、やはり当時の人口の増加は経済的に豊かであったことを示していると思われる。今は経済が豊かになると教育投資に熱心になって、人々はあまり多くの子どもを持ちたがらず、人口が増えないが、19世紀～20世紀初頭の日本はマルサスの世界なので食糧が豊富なら人口は増えた。人口増加のもう一つの帰結は、教育への投資と、軍事に関してもかなりの支出ができることである。いずれにしても、黒船来航までの130年間、日本の人口は3,100万人でほとんど変わっていないが、藩別に見ると減っているところと増えているところがあって、それが相殺されて同じに見えるだけだということが分かる。

② 人口増加地域に浸透する平田国学

そのようななかで、人口増加を記録している、薩摩、周防・長門、土佐、津和野、名古屋とその他2～3の藩では平田国学が盛んだった。それに関して『夜明け前』ではどう書かれているのか。当時、誰かに何かを学びたい場合、先生に正式に弟子として認められると門人帳に名前を記載してもらえたので、平田国学がどの地方にどれほどの門人を持っていたかは門人帳を見れば分かった。そこでまず、藤村はそれを調べている。『大黒屋日記』を見たかどうかは分からないが、江戸後期に人口増を経験した地方では、武士階級に平田国学が受け入れられていた。平田国学には元々医師や庄屋等の農民の上層階級や一部のイ

ンテリの町人などの門人がいたが、『夜明け前』の中で国学の過激派として描かれる暮田正香は天保時代の門人帳を見て「見たまえ、こないだわたしは鐵胤先生(平田篤胤の息子)のところで、天保時代の古い門人帳を見せてもらったが、あの時分の篤胤直門は五百四十九人ぐらいで、その中で七十三人が士分(武士)のものさ。全国で十七藩ぐらいから、そういう人たちを出してるよ。最も多い藩が十四人、最も少ない藩が一人というふうだね。鹿児島、津和野、高知、名古屋～」と言っている。明治維新の志士たちが西南雄藩から出てきた背景として、人口増を記録する豊かな地方であったために、教育や軍事等に金を使うことができたというのは、経済的な説明として可能である。実際に、軍事費の支出は幕府の財政から知ることができる。

もう一つ重要なのは、意外に侍連中に平田国学が浸透していて、それによって一種の攘夷思想に多くの人が魅了され、加わったのではないかということである。平田国学が武士階級に浸透していた地域と、明治維新の志士を出したところが重なっていることが重要だと思う。

(2) 衰弱する幕府権力と藩の経済

① 財政難とインフレーション

もう一つ、島崎藤村の『夜明け前』における経済的な記述で重要なのは、幕府権力が凋落していく過程である。それはいくつかの点で述べられている。1点目は国内の治安の悪化で、街道も安全に旅ができなくなり、東海道には追い剥ぎが出るから中山道の方がマシという状況になって、自衛団のようなものが方々に作られた。そしてもう一つ、決定的に重要な要因となったのが、黒船の来航である。そのために、幕府は国防に金を使わなければならなくなった。それは諸藩も同様で、多くの金が必要になった。このように、国防と警察に金がかかるようになった結果、幕府も諸藩も財政が厳しくなったのである。

そこで、必要な金を得るためにいくつかの対策が講じられた。一つは、金貨・銀貨の品位を落として含量の少ない金貨・銀貨を流通させ、その差益を幕府収入にするという策である。通貨を劣化させて改鋳益金を得るという仕組みは、今の赤字財政を税ではなく国債でファイナンスするのと似ているが、江戸時代の藩財政、幕府財政の専門家であるお茶の水女子大学の大口勇次郎氏の推定によると、幕府財政の収入に占める改鋳益金、つまり品位の劣る通貨を出して差益を収入にした割合は、明治維新の5年前の文久3年(1863年)には68%に達していた。今の日本も数字の上から見るとGDPに対する公的債務の比率が世界一高いという不健全な状況だが、幕末の幕府財政もかなり似たような状況にあったと言える。

各藩も資金を調達するために藩札を次々に出している。そうなると、流通する物産やサービスが変わらないのに通貨量が増えるので、当然、インフレが起こる。つまり、通貨の価値が下がるわけである。

② 劣悪な銀貨の流入と金の流出

インフレのもう一つ大きな原因は、外国貿易である。幕末に通商条約を結んで広く貿易ができるようになったが、鎖国時代に日本が貿易をしていなかったというのは事実と反する。長崎や対馬や松前などいろいろな港で貿易をしていたので、鎖国は貿易をしていなかったという意味ではなく、貿易を幕府が管理していたという認識になる。

そういう中で、明治になって一大事件が起こる。日本国内では金と銀の交換比率が金 1 の重さに対して銀 5 だったが、世界相場は金 1 に対して銀が 14~15 の比率だった。これは大変な差である。そういう状況において、外国の商人たちは劣悪な銀を日本に持ち込んで日本の金を買取り、そのために日本の金が大量に流出した。どのくらい流出したかについては、経済史家の計算によって諸説あるが、外国に流れた小判は 90 万両~300 万両ほどと言われている。つまり、当時、洋銀と呼ばれていた劣悪な銀貨が大量に入って来て、金が出て行ってしまったことが、通貨価値を下落させる大きな力として働き、インフレにさらに火をつけることになったのである。

③ 裏切られた「御一新」への思い

そのため、攘夷派は横浜開港記念日の 6 月 2 日を「屈辱の日」と呼んでいる。西洋の商人たちが主として横浜で金銀の売買をして、日本から良質な金が流出し、劣悪な銀が入ってきたという理由からだが、これは国学者にとって、劣った西洋思想が日本に蔓延したこととイメージが重なる。明治 10 年頃から英語熱が盛んになって、若い人が皆、英語のリーダーを手に入れた頃と似ており、藤村は『夜明け前』の中で「日本語が減びてしまうのではないかと危惧している人が多い」と言っている。最近『日本語が亡びるとき』というおもしろい本を書かれた水村美苗という作家が、日本人が日本の文学を大事にするためには日本語で書かなければならないという立場から逆説的なタイトルを付けているが、明治 10 年代もそういう議論がなされていたのである。

じつは、青山半蔵も若者の英語熱の高まりを嘆かわしいと思っており、日本が中国の思想・文化に染められ、中世以降、日本そのものを完全に見失ってしまったと考えていたので、そういう立場から、「御一新」は復古であり、元の日本自らの精神に戻ると期待していた。平田国学が言うような自らの精神に日本が戻り、新しい神仏習合ではなく、国学の精神で日本を再建すべきだと熱烈に主張していたのである。

ところが、実際は「幾世紀をかけて積み上げてきた自国にあるすべてものが価値なきものとされる」「糊口の途を失った琴の師匠が大道で琴をひき」「一流の家元と言われた能役者が都落ちをして、旅の芸人の中にまじる」という時代になった。能は明治政府から保護を受けられず、放り出されたのである。「この国にもすぐれた物のあることを外国人より教えられる」ようなあり様で、我々には未だにそういう傾向がある。

例えば、明治時代の日本は浮世絵の価値を認めていなかったもので、有田焼などを輸出する際、我々が壊れやすいものを新聞紙で包むように浮世絵で包んで輸出していた。それを

向こうで見た外国人は、東洋の小さな国でこのような美的センスを持った芸術家たちがいることに大変驚いたのである。それで、ゴッホやモネに代表される印象派だけでなく、フランスだけでなく、ドイツでもイギリスでもジャポニズムが起きた。それによって日本人は、「外国人が良いと認めたから、これは良いのだ」と自国の芸術に自信を持つようになったわけだが、そのようなことがすでに明治時代に起きていたのである。その背景には、西洋文明の流入により、かなりのレベルの科学技術が入ってきたので、西洋文明自体に対する当時の日本人のコンプレックスがあったと思う。

このように、明治維新を「御一新」と思っていた平田派の国学者、平田国学に入れ込んでいた若い人たちが裏切られる結果になったことを『夜明け前』は鮮烈に描いている。

IV 「近代人」の自己撞着

『夜明け前』には、青山半蔵自身の性格描写として、当然、気がふれる以前の半蔵がどういう人物だったかということが描かれているが、じつはもっと具体的に描かれているのが脇役である。その中で注目すべき人物が3人いる。

(1) 宮川寛齋 — ビジネスと宗教の間

1 人目は宮川寛齋という人物で、青山半蔵に平田国学を教えた先生であり、医者であるが、幕末～明治初期の日本人の宗教などの精神的な世界と、合理的な行動を必要とするビジネスに与えた影響、そして、その二つがいかなる矛盾を抱えたかを典型的に示す人物として描かれている。

宮川寛齋は、安政の大獄が起きて混沌とした世の中で人々が興奮の絶頂にあるときに、中津川から横浜に行き、横浜で外国の商人と生糸の取引をして儲けている。この人は平田国学を若い人に教えながら、弟子たちには黙って、横浜でリスクをかけて儲けていたわけだが、結局は知られてしまい、青山半蔵の親友であった蜂谷香蔵等の弟子たちを「国学者には国学者の立場もあろうじゃありませんか。それを捨ててただ儲けさえすればよいというものではないでしょう」と怒らせることになる。

それに対して、宮川寛齋は「そうではない」と言って、本居宣長の『玉勝間』を例に挙げ、「金銀ほしからずといふは、例の漢やうの偽にぞ有ける」つまり、金などは要らないというのは偽善であり、その偽善は中国から来ているという言葉を用いて、本居宣長のような立派な人は、私がビジネスで一時的に利を上げたことを理解してくれるだろう、若い連中には私の気持ちなど分かるはずがないと言い、その「私の気持ち」の一つは自分の老後の心配であり、いずれ飯田辺りで老後の生活を送ろうと考えていて、必要があるからこそ自分はビジネスをしているのに、血気盛んな若者はそれを理解しない、非常に単純な連中だと言っている。

ただ、「本居宣長は金銀を貪ることが悪いと言っているのであって、金など要らないと

いうのが中国から来た考えである」など、宮川寛齋は本居宣長の言葉から都合のよいところだけを引用している。本居宣長は度を越した金銀欲を批判しており、「金、金」と浅ましいことを言うのに比べたら、「金など要らぬ」という漢意(からごころ)も特別悪くはないと文章の後の方で言っている。それを宮川寛齋は「漢意は偽善だ」という言い方で、自分はそれよりも自分の将来を合理的に考えている、ある種のやらざるを得ないという諦めに基づいてやっていると言っている。

つまり、宮川寛齋という人物は、近代化で人間が現世的になり、合理的に行動することが生活を豊かにする、経済行動で非合理的なことをしていたら競争に負けてしまうので、合理的に動くことが重要だと一方で信じながら、もう一方では、精神世界で人間がどう生活すべきかに関してある種の矛盾を体現した人物である。しかし、私は、正直な人物だとも思う。明治維新後の近代化が抱えた一つの問題として、我々が、そういう精神性と実際の物質的な世界をどう調和するかということ突き付けられたことを描くために登場した人物だと思っている。

(2) 暮田正香 — 過激派の転身

2 人目は、先ほども触れた暮田正香という人物で、身分は士ではなく、農民だと思ふ。これらはすべてモデルとなった実際の人物がおり、宮川寛齋も実在の人物がいるし、暮田正香も伊那の尊王思想史の中に同じキャリアを積んだ人物がいるので、藤村がそれを参考にしたと思われる。

この暮田正香という人物は、思想のために動く、現代でいう過激派で、水戸学を学んだ後「一切は神の心であろうでござる」と、古代の日本に戻るべきであると主張する。そして、京都の等持院にあった足利尊氏の木造の首と位牌をすべてはずして鴨川の河原に並べ、官憲に追われて逃げ回るが、逃げている途中に馬籠まで来て青山半蔵の家に匿ってもらう。



「カミとホトケの交渉史
— 廃仏毀釈の爪痕 —」
出版：飯田市美術博物館

明治維新によって体制が変わると、明治政府は神仏分離と、それに基づいた廃仏毀釈を行った。飯田市美術博物館編集・発行の『カミとホトケの交渉史 — 廃仏毀釈の爪痕 —』は、廃仏毀釈が具体的にどの寺でどのような形で起こったかということに触れて、元々神と仏が日本でどういう形で混ざってしまったのか等をまとめたおもしろい本だが、それによると、日本では長い間神も仏も融合し、あるいは神を仏の下、仏を神よりも上に置いていた。それを「怪しからん」として神仏を分離したわけである。神宮寺は神道と仏教が一緒になって一角に両方があるという形で、日本には多かったが、ある神宮寺は廃仏毀釈のときに仏像を叩き潰される等、大変な被害を被っている。

そのようななかで暮田正香は、維新後に平田国学の知識を活かしたのか、神道の世界で

大いに出世する。過激派は、現実適応能力がないように見えて自己主張が強いという意味で、過激派時代の思想とそれ以降の思想は内容的に変わるにしても、自己顕示と自己主張の面ではそれほど変わらないという典型だと思うが、暮田正香の転身振りは驚くべき早さである。明治 2 年に神道国教祭政一致の太政官布告が出され、神道の国家と決められたが、政教分離によってすぐに撤回される。そして、その辺りからじつは教務省の中に多く入り込んでいた平田派の心酔者たちが冷遇されるようになる。それなのに、冷遇されているにも関わらず、暮田正香は神社の中で出世を遂げる。

その理由を考えると、これも近代社会で比較的に見られるタイプだと思うが、過激思想に染まる人は自己主張を含めて思考力がある。そういう人が状況の変化に応じてどのように身を処したかを考えると、いつの世にもこういう人物はいると思わざるを得ない。過激思想に走っていたかと思うと、次には振り子が逆の方向に振れるように別の方向へ行く。それが暮田正香という人物で、一つの極端なケースではあるが、足利尊氏の木像の首を切るという行動に出る。戦後、足利尊氏は歴史上の活躍が知られるようになるが、戦前は一種の国賊だったので、暮田正香が足利尊氏を敵視したことは理解できる。そして「御一新」後、政府の宗教政策が変わっても、暮田正香は神道の世界で大変な栄達を遂げた人物となる。

ただ、そのような転身を遂げたにも関わらず、厄介なことに彼は本気だった。自分で狡いことをしているとか、オポチュニストという感覚はなくて、最後に青山半蔵に別れを告げに来たときも、酒を飲みながら杜甫の詩を吟じる。それは実力のある官僚が報われずに乞食同然の姿で道を歩く様子を描写する詩で、彼はそれを吟じながら泣くのである。その場面で、暮田正香は本当に泣いていると思う。こういう人は自分が狡い立ち回りをしていくという意識はなくて、熱烈に信じている情念通りに動いているだけだと思われる。

(3) 松雲和尚 — 近代の神仏同体説

3 人目は曹洞宗の松雲和尚で、半蔵によって自分の寺に火をつけられた被害者である。半蔵は「日本の神と仏の関係が無茶苦茶になって、本地垂迹ほんちすいじやくなどが唱えられてから、この国の神は大日如来や阿弥陀如来の化身とされている。神仏がこんなに混合されてしまって、之は末世の証拠だ。黒船は嘉永 6 年が初めてなのではない。伝教(最澄)も空海も、皆、黒船(最澄も空海も中国に渡って仏教を学び、日本に帰って天台宗、真言宗を開く)である。漢学びの深い影響を受けない古代の人の頃に立ち返って、もう一度心豊かにこの世を見直せ」という考えから狂気に走った。しかし、萬福寺の松雲和尚は寛大だった。自分の寺に火を放たれたにも関わらず、その一件が落ち着いた後、「国学徒があれほど激しい動きをしなければ、仏教徒が目覚めるようなことはなかっただろう」と擁護するようなことを言っている。このように、松雲和尚は寛大の精神だけではなく、相手の立場に立って物事を考えることができる大変な人物として描かれている。

島崎藤村は、遺作となる『東方の門』という小説を戦時中に書き、太平洋戦争が始まって2年ほど経った1943年に中央公論に発表した。その語り部が松雲という和尚である。一言述べるなら、この『東方の門』という小説は未完であり、読んだ感想としては、およそ文学の香りのしない作品で失望した。しかし、それは何も藤村の『夜明け前』の素晴らしさを傷つけるものではない。作家は最も優れた作品で評価されればよいので、そういう意味で、島崎藤村は私にとってそれほど好きな作家ではないが、ただ『夜明け前』は例外的に素晴らしい作品だと思っている。篠田一士という優れた文芸評論家が『二十世紀の十大小説』という本を書いているが、その中で日本からエントリーしているのは島崎藤村の『夜明け前』だけである。他はプルーストとかカフカとかジェイムス・ジョイスなど、西洋の作家の作品が並んでおり、その最後が島崎藤村の『夜明け前』だった。

その『夜明け前』の中で、近代の神仏同体説に関してかなり詳しく議論されているので、参考文献を読むよりも、あるいは私の話をお聞きいただくよりも、原作そのものを読んでいただくことが一番重要だと思う。

V 「御一新」への失望

(1) 山林問題

『夜明け前』において、青山半蔵が「御一新」への期待を完全に否定され、裏切られたと結論づけるきっかけとなったのが山林問題である。木曾五木という木曾谷の5種類の木の伐採が禁止されるなど、いろいろなルールがあったが、これまでは9割ほどの山で森林に入ることができた。それが、明治維新によって9割が官有林にされ、そこで林業をしていた人たちの生活の道が閉ざされてしまった。それに対して半蔵は反対運動を起こしたのである。

その反対運動が中央政府の逆鱗に触れ、半蔵は町長的な職を解雇される。そしてそれが、彼の精神のバランスを崩し始める大きなモーメントになる。経済史の専門家の中には、じつはこの山林問題が『夜明け前』の白眉であり、この部分が圧倒的にももしろいと言う人もいる。そういう意味で、まだ『夜明け前』を読まれていない方は読んでいただくと、この山林問題が、当時の日本の社会、特に木曾のように山林を生活のベースにして生きている人たちにとっていかに大きな問題であったかということを理解していただけたらと思う。

(2) 福沢諭吉の描写

もう一つ、日本人が西洋人に評価されて初めて自信を得るようになったとか、何でも真似をしたがるとか、自分たちが築き上げてきた文化的な価値あるものに見向きもしないようになったと言われていた、ほぼ同じ時期に、福沢諭吉が『文明論之概略』の中で語ったことを紹介したい。

『文明論之概略』は明治7年頃から書かれて明治8年に完成したと思われるが、まさに

「御一新」の興奮が終わり、人々が自由になったビジネス活動等々に狂奔した時代である。そのような社会の風潮に対して、福沢は次のように言っている。「概して云へば今の時節は上下貴賤皆得意の色を為す可くして、貧乏の一事を除くの外は更に身心を窘るものなし」つまり、全部自由になって心配事がなくなったわけである。「討死も損なり、敵討も空なり、師に出れば危し、腹を切れば痛たし。学問も仕官も唯銭のためのみ、銭さへあれば何事を勉めざるも可なり、銭の向ふ所は天下に敵なしとて、人の品行は銭を以て相場を立てるものゝ如し。此有様を以て昔の窮屈なる時代に比すれば、豈これを気楽なりと云はざる可けんや」と、皆が金銭的なことに敏感になって走り回っていることを認めているわけである。「故に云く、今の人民は重荷を卸して正に休息する者なり」と、福沢のこの時代の評価は、じつに懐が深いというか、一生懸命やって、何でも金のためにやってしまっているとは言っているけれども、じつは、それは皆が自由になって休息している時期なのだと言っている。

福沢は「お金を拝む拝金宗の徒だ」と言われるが、彼には露悪的に極論を言って人を驚かせるところがある。例えば、「文明国の男子の本懐は錢にあり」という一文は、その部分だけをとって「金だけと考えている」と反福沢の人に言われているが、福沢が考えていたのは経済的なベースがないと人間は独立できないということである。独立自尊、つまり独立した考えを持ち得るためには、経済的なベースがしっかりしていないと、どうしても人は従順になってしまう。経済力のない子どもが政治を論じても説得力がないように、独立している人間こそ本当に「こうすべきだ」と言えるということを福沢は考えた上で、経済的ベースの重要性を説いているわけである。つまり、金がすべての相場を立てるときの基準になっていると言うけれども「豈これを気楽なりと云はざる可けんや」として、それを認めなければダメだということである。

『夜明け前』の中で宮川寛齋は「若い者には自分の気持ちは分からない」と言い、金など要らないというのは偽善だと言っている。それは自己弁護のように聞こえるが、明治以降の日本人はそういう問題に直面し、その矛盾を認識しながら、自己流の解決を見つけなければならないという運命だったのではないかと思う。

最後に、ここまでお話しした上で、私がお伝えしたいのは、やはり本そのものを読むことが大事だということである。外国の大学に行くと、私は生協などでテキストブックに何が使われているか、学生がどういう本に興味を持っているかなどを見ることがしばしばある。そこから分かったことは、日本は解説ものが多いのに対して、外国は古典そのものに取り組む姿勢が日本よりも強いということである。そのように考えると、私がここで『夜明け前』の解説をするのは自己矛盾になるが、実際に『夜明け前』を読んでいただきたいと思う。長い作品だが、最後まで読んだときの快感があるし、それ以上に内容が素晴らしいので、ぜひ読まれることをお勧めして、私の話を終えたいと思う。

質疑応答

- Q1 国学とは何か、平田国学は新たな解釈ができるのではないか
- Q2 藤村が『破戒』で被差別部落問題を取り上げたのはなぜか
- Q3 内乱の背景には、政府の国民に対する説明責任の問題があったのではないか
- Q4 明治維新で抑圧されたもの、活かされなかったものは何か

Q1 国学とは何か、平田国学は新たな解釈ができるのではないか

国学とは何か、神道と国学はどう違うのか。本居宣長が国学を創始したのは外国船が日本の領海を侵犯していたときなので、海外にどう対応するかという視点で国学を捉え直すべきではないか。また、平田篤胤の国学はキリスト教的で西洋の天文学の要素を入れているので、海外の動向を敏感に受け入れた新しい神道の再解釈と捉えた方がよいのではないか。

(猪木)

私の専門外の話になるが、知っている限りでお答えすると、国学は本居が最初ではなく、本居には賀茂真淵という先生がいたし、賀茂真淵には契沖がいたので、ある意味で本居は国学の伝統を受け継いだ完成者と見た方がよいと思う。元をたどれば、上の世代から「漢心とは何か」「我々の思考や行動は何に支配されているのか」「夾雑物を取り払ったときに何が残るか」などを考える思想は本居宣長が初めてではなかった。つまり、6世紀に仏教が伝来する以前の日本人がどうだったかという話についてはいろいろな解釈があると思うが、一つ言いたかったのは、本居宣長よりも国学の歴史は古いということである。

もう一つの点は賛同する。平田篤胤は、ご指摘のようにキリスト教に関する知識が深く、また西洋技術をよく知っている。したがって、ある教えとその教えを信奉している人が考えたことには違いがあると思う。別の言い方をすれば、平田篤胤あるいは鐵胤の門人となった人たちの考えていた平田国学と、平田自身がどういう知識の体系を持っていて、どういう神道あるいは国学の体系を持っていたかということには大きな違いがあるかもしれない。そういう意味で区別すべきなのは確かであり、平田はもっと合理的だったと思う。平田に関しては、岩波文庫に阪大の子安氏が後注を付けた本があるので、私もそういうものを勉強してみたいという気持ちがある。

Q2 藤村が『破戒』で被差別部落問題を取り上げたのはなぜか

島崎藤村は『破戒』で被差別部落問題を取り上げたが、他の人がほとんどテーマにしないなかで、皆に平等であるなら、抜けているところを取り上げる先人になろうと思ったのか。

(猪木)

先ほど、私は島崎藤村をあまり好きではないと言ったが、『破戒』は感動した。アメリカへ渡ってしまう結末はあまり好きではないが、非常に迫力のある部分は何ヶ所かある。

米を量りに来る場面や、利根川の渡し船に乗るときの情景を描いた箇所など、筆力のある凄腕作家だと思うし、立派な作品だと思う。それだけに、最後の部分は残念に感じる。

しかし、『破戒』は二つの意味で記憶されるべきである。一つは、夏目漱石が激賞したこと、もう一つは、島崎藤村がこの作品で作家として二つの新しいことをしたことである。まず、明治時代の作家は書いた原稿を一括して買い取られていたが、それを印税制度にしようという出版社と交渉し、その結果、『破戒』は一括買い上げではなく、初めて刷り数に応じて収入が入る形になった。島崎藤村はそのような運動をした人でもある。そういう面もあり、私は島崎藤村のすべてに憧れることはできないが、実際に素晴らしい作品を書いたのだから、作家は最高の作品で評価されるべきだと思う。

ただ、マイノリティや少数派の人々の問題に、意図して目を向けたかどうかは分からない。彼自身も私生活では逸脱的行動が多かった人で、姪との間に子どもができて、フランスに逃亡旅行に行ってしまった。したがって、その人の行動や日常生活と作品は分けて考えるべきだろうが、少し抵抗感があることは確かである。

Q3 内乱の背景には、政府の国民に対する説明責任の問題があったのではないか

明治維新が起こるまで、日本人の多くは尊皇攘夷が成り立つと思っていたのに、明治維新になった途端に開国されたことに対し、なぜ「裏切られた」と怒らなかったのかが疑問だった。それが『夜明け前』を読んで、青山半蔵のように怒った人もいたことが分かった。それならば青山半蔵の悲劇的な最期を回避するためにも、政府は「日本の独立を守るために開国した」と説明するべきだったが、口をつぐんだために西南戦争等が起きてしまった。

同じように、今の政府には原発の可否という争点があり、それに対して「原発を止めたら経済成長が止まる」とはっきり言うべきだと思うが、日本の政治家はなぜ話さないのか。

(猪木)

非常に大きな問題だが、今の政府と維新の政府はガバナンスという点で性格がかなり違う。維新の政府では重要ポストを薩長土肥の参議が決めており、その中で起こった西南戦争は、薩長の影響力の強い人物が政府や産業のポストを独占したことに対する不平士族の反乱だった。江戸時代までの日本は、各藩に藩校などの立派な教育機関があり、教養のある人間がたくさんいたが、その人たちが職を得ることができなくなったわけである。

皇族や大名たちは特権的地位を得たが、一般の武士たちは特権的地位もなく、金禄公債をもらっても秩禄処分で生活の途を閉ざされてしまった。それによって反乱を起こした形になるが、そのベースには、経済的な途が閉ざされた理由として、中央が薩摩・長州によって占められたという事実があった。つまり、各藩に立派な人材がたくさんいたのに、その人材を腐らせてしまったことが、不平士族の反乱の原因である。明治2年に大村益次郎が殺されたのも不平士族の反乱と考えると、10年ほど内乱が続いて、国が収まっていなかったことになるが、そのときに政府が何を言うかは、今、安倍総理大臣が肝心なことを言っていないというのとは意味や条件が違う。

明治政府が大久保の手によって中央集権的な形でまとまったこと自体は是とすべきかもしれないが、その中央集権的体質は今でも我々に染み付いている。教育もそうである。中央政府の文科省が「小学生のランドセルが 6kg 以上ある場合は、各学校のルールでテキストを教室に置いて帰ってもよい」というような通達を出す国は珍しい。そういうものはガバナンスの問題ではなく、アドミニストレーションの問題なので、もっと分権化すべきである。日本が未だにそういう体質を持っているのは、やはり明治時代に得た何かの染み付いているのではないか。日本の権威意識もそれと関係していると思う。大学はどこがよいとか、新聞はどこがよいとか、そういうぶら下げているもので人を判断する。我々は、そういう権威主義に染まっている状態から目覚めなければならない。

Q4 明治維新で抑圧されたもの、活かされなかったものは何か

明治維新はいろいろ湧き起こっていたものの一部を抑圧して成し遂げられたが、青山半蔵が座敷牢に閉じ込められたのはその抑圧を象徴していると思う。そのときに抑圧されていたものは何だったのか。また、昭和維新で軍事国家が成り立って戦争が起こり、敗戦で終わったが、そこから新たな開国、新たな維新が成り立った。そこでもいろいろなものが抑圧されて座敷牢に押し込められて終わっていると思う。現在の日本に置いて、座敷牢で無念の死を遂げたものは何か。活かすべきものはなかったのか。

青山半蔵が純粋だったことは繰り返し述べられているが、その純粋な部分を誰も守れなかったし、活かせなかった。そこには藤村の息子としての思い、世の中に排斥されて死んでいった恥ずかしい父という思いも、10歳で別れて会うことのなかった父への思いもあったと思う。それは彼が明治維新以前にあったであろう、あるいは実現できたかもしれない日本に対する思いでもあったと思うが、どう思われるか。

(猪木)

おもしろい質問だと思う。一つは、何をして藤村に大作を書かせたかということだが、そのポイントは父に対する愛情である。理解しようとしてやっと理解できたということ、それを具体的に自分の筆で書き記したいという思いだったと思う。

何が半蔵を悲劇的な最期に導いてしまったのかというのは、現代的に考えても、戦前の日本で考えても、日本だけの特殊な現象ではないと思うが、表現の自由、信教の自由を抑圧する力が強かったと思う。これは私にとっては非常に難しい重大なテーマではあるが、表現の自由があればそれで済むという問題でもなく、確かに戦おうとすれば、青山半蔵が維新後も「日本がこんな姿になったのは自分の想像とは違う」と思えば、彼が取り得た行動はあったかもしれない。しかし、結局、彼を狂わせたのは時の流れではないか。

歴史には流れがあって、それに抵抗することはできないし、抵抗するとこのような悲劇的な末路が待っていることが多いと思う。これは安易な歴史観のように思うが、やはり時の勢いというのはある。その勢いの中で、彼は八方塞がりになったのではないか。あるいは、自分の信仰や政治的信条が何かを実現するような出口を見つけることができれば、彼

はこのような最期を遂げることはなかったと思うが、それができないと感じたのは、この勢いには抗することができないと悟ってしまったのではないか。それ以外には考えられない。それでも合理的であれば、戦えばよいわけである。

本当に難しい質問で、一考に値するが、それが現代で何に相当するかというと、現代も表現の自由について言えば、PC(ポリティカル・コレクトネス)として禁句がたくさんある。「これを言うと拙い」と考えて、言う前にファビオ・ファシズム、つまり自己検閲が強くなる風潮がある。「これを言っては拙いのではないか」と自分で自分を検閲することが、子どもの世界でも、大人の世界でも浸透している。そういう一種の社会的風潮という点で明治維新後の日本と今の日本を比べれば、今の日本の方が豊かであるし、進歩していると思うが、そういう面での息苦しさがあるのではないかと思う。

発行日	2024年 2月 29日
講演著者	猪木 武徳
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエアロ 大仲佐代子

ISSN2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲエテ」の胸像
(国際高等研究所庭園)